

【概要】

私は業務担当副看護部長の立場から、看護師業務負担軽減を目的に看護補助者の業務拡大が平成30年度のミッションとして与えられた。当院は、平成30年6月から25対1急性期看護補助体制加算（5割以上）を算定しているが、看護補助者は派遣雇用で定年がなく、高齢化による体調不良で休職する等で、安定した確保と定着が課題であった。そこで、視点を夜間急性期看護補助体制加算取得することにした。その方策を看護部、事務部、経営企画副病院長と共に検討し、看護補助者として当院の学生を雇用することになった。

病院のトップの承認を得る戦略として病院経営改善と看護師業務のタスクシフティングがポイントである。診療報酬的に、夜間急性期看護補助体制加算（100対1）と夜間看護体制が同時に算定可能であることから、看護のちからで約1億円の増収が見込めることが推進力となった。次世代の医療人である看護学・医学生による看護補助業務に関しては看護部で検討し、高齢者のせん妄症状や認知症からおきる転倒・転落のリスク回避のために見守りができることで、安全で安心した療養環境の提供と看護師の業務負担軽減を推進するために計画を進めた。

平成30年9月から学生の募集を行い11月の稼働で14名、平成31年1月に21名確保でき、11月の実績を申請し平成31年1月から夜間急性期看護補助体制加算（100対1）取得できた。また、看護師長と学生看護補助者へのアンケート結果から勤務時間の検討が今後の課題となった。

【背景】

当院は宮崎県で唯一の大学病院で632床を有し、最後の砦という役割を担っている。近年の超高齢化、重症化した患者および認知症患者の増加により、看護補助者によるタスクシフティングで看護師の業務負担軽減や、患者へ安全な療養環境を提供する必要がある。当院は、平成30年6月から25対1急性期看護補助体制加算（5割以上）を算定しているが、看護補助者は派遣による雇用のため定年がなく、高齢化による体調不良で休職する等で、安定した確保と定着が課題である。そこで、夜間帯に看護補助者を配置することで患者にとって安全な療養環境を提供できること、次世代の医療人である当院の学生（医学科と看護学科）を看護補助者として雇用することで夜間急性期看護補助加算を取得し病院経営に参画することを、病院経営企画会議で提案した。

【実践計画】

国立大学病院において前例がないプロジェクトであり、看護部、事務部門、学科、経営企画担当医師と連携をとり以下のように計画を進めた。1：病院経営企画会議で医事課施設基準担当が診療報酬改定による夜間急性期看護補助加算による病院収益に関する説明をする。2：学生補助者の確保については、総務課が学内メールで広報し募集を行い、看護部がポスター掲示を行うとともに学生支援課に学生へのPRを依頼する。3：看護部主導で学生向けの説明会を複数回実施する。4：看護部の看護補助者活用推進委員会と協働し、学生看護補助者の業務手順や運用のルールを整備する。5：看護師長会にて学生の看護補助者の説明をする。6：看護補助者に必要な採用時研修（2時間）を実施する。7：運用後2ヶ月後に配置病棟看護師長と学生補助者にアンケートを行い評価する。

【結果】

1～7の計画は他職種の協力があり、ほぼタイムスケジュール通りに進んだ。学生看護補助者はSNA（Student Nursing Assistant）と名付け、11月1日付で13名（医学生5名、看護学生8名）から運用開始した。7対1の一般病棟10部署に1名から2名のSNAを配置した。学生は病院雇用となるた

め採用時面接時に部活や学業と両立できるように勤務の希望を考慮した勤務表を作成した。11月の運用開始時は看護補助者活用推進委員会の看護師長と病棟ラウンドを行い、SNAと病棟看護師の意見を聴取し、業務のタイムテーブルを見直した。学生の応募はポスターや学生間の口コミ勧誘で1月末は21名の学生が確保できた。12月の実績をもって、夜間急性期看護補助体制加算の届出ができ、1月の実績が算定可能な時間数をクリアした。SNA運用に対する評価として病棟看護師長とSNAへのアンケートを行なった。看護師長からは、体位変換や患者の見守りの業務により看護業務の負担軽減になった、しかし、SNAの勤務時間を変更することで患者の日常生活援助の範囲をもっと拡大できる等の意見があった。SNAを経験した学生からは、今回のSNAの経験が卒業後医療者となる上でとても役立ったSNAのアルバイトに満足していると意見があった。しかし、「就業時間について1時間早くに開始して欲しい」や「翌日の学業や実習に影響するため3時間の就業時間にして欲しい」等、就業時間に関する建設的な意見が多かった。

【評価及び今後の課題】

SNAの運用により夜間急性期看護補助加算（100対1）算定が評価され医療機関別係数（機能評価係数I）が上昇し病院経営に貢献している。また、夜間の看護師の業務負担軽減につながるとともに、患者へ安全で安心できる療養環境の提供につながった。そして、医学生と看護学生が病棟勤務を経験する機会から次世代の医療人育成に貢献できたと考える。今後の課題は、安定的なSNA確保のために業務時間の検討と看護補助者の業務拡大を行い患者への直接的ケアの充実が必要である。